

# 第一次世界大戦の時代状況に向けた カール・バルトの説教

—— 1914—1915年になされた説教を中心に ——

牧 村 元太郎

## はじめに

カール・バルト（1886～1968）は、彼が生涯かけて書き続けたキリスト教2000年にわたって教会が語ってきた諸教理、諸神学の言葉の聖書に基づく問い直し、批判的再検討再解釈として書かれた9000ページを超える教義学の未完の大著『教会教義学』（1932～1968）や、第一次世界大戦というヨーロッパ文明社会の破局の中から「ローマの信徒への手紙」を解釈して神の言葉を語り、時代に対して衝撃を与えて、彼の名を世に広く知らしめることになった『ローマ書』（1919年第1版、1921年第2版）、また、ナチスの危険性をいち早く悟り、ナチスに同調して血と民族の伝統からの啓示を信仰の源泉としてキリスト教信仰に混ぜ込む「ドイツキリスト者」の繁茂増大に対してイエス・キリストを神の唯一の自己啓示、主であるとして告白したバルメン宣言の起草者となり、そこから起こったドイツ教会闘争やその担い手たる告白教会をサポートした関わりなどで、良く知られ、20世紀最大の神学者とか、ヒッポのアウグスティヌス、トマス・アクイナス、ジャン・カルバンとならぶ神学者といわれる。

バルトは、『ローマ書』で世に知られたことがきっかけになって、ゲッティ

ンゲン大学に招聘されてから、バーゼル大学で定年退官するまで、生涯のほとんど、大学の神学部で組織神学の教鞭をとり、献身して牧師として教会に遣わされる神学生を育てる働きをしたが、その前は1911年から1921年までスイスのアールガウ州のザーフェンヴィルという小さな村の改革派の牧師であった。そして、彼がこの村の牧師として、10年間教会員と共に過ごしつつ牧会し、毎週日曜日に講壇にたって御言葉の説教を行うために神と格闘して祈りつつ経験したものこそ、その後の彼の生き方と神学形成にとって決定的な意味をもったものであると、考えられる。後に（1945年）バルト自身の表明に基づくものと思われるが、彼のそれまでの歩みは、「彼が田舎の牧師であったこと、またこの田舎の牧師としての務めをいかにも彼らしい積極性（Bewegtheit）と徹底性（Ganzheit）で真剣に受け取って行使したことによって規定されている」とコメントされている。彼自身「あそこではじめて、改革派の説教者、教師、牧会者であるとはどういうことか、ということの全体像が私に少なくとも意識されてきたのだ」<sup>(1)</sup>とも、言っている。

彼が、このザーフェンヴィルの村の人々のもとにあって牧会者として、何よりも聖書から神の言葉を語るべく立てられた説教者として遣わされ、そこにいる人々に仕えてその職務を精一杯果たしていく中で、彼の神学と生き方（彼が後に「今日における神学的実存」とよんだもの）が形成されたのである。

さて彼がザーフェンヴィルの牧師として、説教者、牧会者として働いていた時、ヨーロッパの諸国の間で国と国との緊張関係は、特にバルカン半島におけるそれをめぐって急に破局的になり、ついに戦争となり、それはあっというまに全ヨーロッパに広がった<sup>(2)</sup>。第1次世界大戦である（当時それは単に「大戦」、あるいは「ヨーロッパ大戦」といわれた）。スイスは、中立国であって参戦国にはならなかったが、戦争はたちまち人々の日常生活を巻き込んだし、何よりもこの戦争のすさまじくも過酷な有様が新聞に知られるにつけ、人々の心に衝撃を与えずにはおこななかった。バルトは、大戦勃発からほとんど毎回と言っていいくらいに、講壇で、この戦争が意味するものについ

## 第一次世界大戦の時代状況に向けたカール・バルトの説教（牧村）

て、直接に、あるいは、間接に言外に念頭におきつつ言及して語り、この戦争によって神が人々に教えているものを明らかにしようとした。本稿は、バルトが、このころバルトの内的な状況とこの戦争の状況下に、ザーフェンヴィルの教会の会衆に、説教しつつ、聖書をとおして、神から、何を受け止め、何を語ったかを、明らかにしたいと思う。

テキストは、ドイツ語原書としては、Karl Barth : *Werke, Bd.27 Predigten 1915* (TVZ Verlag) および、同 *Bd.26. Predigten 1914*, 翻訳としては、日本基督教団出版局より二回にわたって刊行された『カール・バルト説教選集』（以下『説教選集』と省略）による。ちなみに、この翻訳は、監修者たち（雨宮栄一、大崎節郎、小川圭治）によって、カール・バルトがその生涯にわたってなされた説教を、原文で印刷刊行されたものも、まだ未刊行のものも、刊行できるものすべてを、説教のなされた日付順に従って、日本語訳にして刊行しようするものである。すでに、第1期は、1991年から1995年までに全12巻で刊行されて、これには、当時すでにドイツ語原文で刊行されていたすべてのものが、日本語に翻訳されて出版された。そして、その後2000年から刊行され始めた、第2期全6巻の最終巻が近く公刊される。これは、第1期以降に、ドイツ語原文が刊行されたものと、手書き原稿を含め現在入手しうる限りのものから日本語に訳出されたものである。

本論に入る前に、二つの予備的な考察を行いたい。一つはザーフェンヴィルの牧師としてのバルトの位置づけなどの日頃の牧師としての立場、生活状況のついてと、もう一つは第1次世界大戦が始まった当初、バルトが、この第1次世界大戦の時期に、どのような問題意識をもち、又どのような立場をとっていたかということをおきたい。

### 第1章 ザーフェンヴィル村の宗教的社会主義牧師カール・バルト

彼は、ザーフェンヴィル赴任後3ヶ月、すでに宗教社会主義の運動と深く関わるようになった。それは実は彼がザーフェンヴィルの牧師として直面し

た課題と深く関係している。彼がこのザーフェンヴィルに赴任した時、この小さな村はもはや単なる農村ではなく、すでに産業資本主義が入り、村の有力者は、工場主となっていた。その人々は、教会でも幹事会を構成し、力をもっていた。他方、貧しい労働者たちの生活苦には深刻なものがあり、労働者たちの中で意識的な人々は、社会主義に共鳴する人々が多かった。そして、教会は、工場主も労働者も、その構成員であった。バルトは、だからといって、これは政治の問題だから、教会とは関係がない、と考えてこの問題を避けて宗教的な教会の働きの中に埋没せず、むしろこの問題と真っ正面から取り組んだ。しかし、神学生時代はベルリンではハルナックやシュライエルマッハー、マールブルクではヘルマンやラーデ（カール・バルトの父フリッツ・バルト牧師の親友で、カールは大学卒業後彼が主催する雑誌「キリスト教世界」の編集助手であった）などについて自由主義神学を学んでいた新任牧師の若きカール・バルトは、彼が学んだ神学の枠組みではこのような労働者の問題や富と貧困の対立の問題などと信仰的、牧会的にとりくむことはできなかった。そういう中で、彼にもっとも大きい影響を与えたのは、トゥルンアイゼンという隣村のロイトヴィルの牧師との出会い、交わりであった。二人は足繁く訪問しあい、手紙を交換しあい、互いの悩みをうちあけあい、直面している様々な問題を語り合った、盟友であった<sup>(3)</sup>。そして、バルトは、トゥルンアイゼンを通して、スイスの宗教社会主義者たち、特に、ヘルマン・クッターに、さらには、そのクッターがその信仰理解の核心において導きとなっていたクリストフ・ブルームハルトに決定的な影響をうけるのである。

当時、スイスの自覚的な牧師の多くが心をよせた宗教社会主義が発見し信じて共通にもっていた確信は、富という偶像（マモン）を崇拜し追い求めるどん欲な産業資本のもとで搾取される無所有の労働者たちが、その貧しさと苦しみの中から始めた、人と人々が共に生き共に分かち合う共同体への希望にむかって立ち上がる社会主義の思想と運動を、公式の制度的キリスト教会もキリスト教の教義学も無神論として敵視するが、じつは、この社会主義の思想と運動には、現代における生ける神の働き、さらにはイエスが貧しい

人々のところにもたらした神の国の福音が反映しているのだというものである。そして、ここでいう、生ける神の働きとの出会いとは、ブルームハルト父子、とりわけ、子のクリストフ・ブルームハルトから彼らに目が開かれたものであった。メットリンゲンの牧師であったヨハン・クリストフ・ブルームハルト（父ブルームハルト）が、その牧する教会の若い女性が悪霊にとりつかれて苦しめられたとき、深い同情をもって主イエスよ、この人に働いてください、と祈ったとき、悪霊が、その女性のもだえ叫ぶ声を借りてイエスは勝利者だ、と叫んで、出ていった、という出来事があり、それ以来、その村にブルームハルト牧師を通して数々の癒しの奇跡が起こった。それらは、不気味なまで不可解な現象であって、生ける神があるがままの地上の一人の小さな人間に直接働いたとしかいいようがないことであった。それは、制度的教会、キリスト教の教義の枠組み、さらには信仰者自身の内面性の生ける体験を大切にする敬虔主義の信仰をもってさえ、とらえることが出来ない、西欧近代のキリスト教全体を震撼させる出来事であった。いわば近代以来長く忘れ去られていた福音書が知らせる終末論的現実（＝神の国の現実）が現代に突如現実となって飛び出したようなことであった。彼は、この働きの場所をバートボルに移して継続するが、その賜物と働きは、父から、子クリストフに伝わり受け継がれ、子クリストフ・ブルームハルトにも同じ神の働きとしての癒しの奇跡が起こった。その神の働きは、子ブルームハルトには、同じ神の国の到来の体験であっても、父によって体験されたローカルな範囲を越えて、人間世界全体を覆う罪の支配を打ち砕いて、新しい人間を創造し、新しい世界をもたらす神の国（終末）の到来として体験され、そのことの予兆をブルームハルトは、労働者たちの社会主義の運動のエネルギーの中に再発見するのである。そして、産業資本主義化のもとに苦しむ下層労働者の問題と向き合うスイスの若い牧師たちは、このブルームハルトに大きな励ましと感動を与えられ、キリスト教の福音メッセージと社会主義が彼らにおいて一つに結びつけられ、宗教的社会主義運動となっていくのである。その根本に流れるメッセージとは、ヨーロッパ中に起こっていた社会主義運動こそ、

生ける神の働きの現れ、神の働きへの応答にほかならないということであった。宗教社会主義者たちにはレオンハルト・ラガーツとヘルマン・クッターという対蹠的なリーダーがいたが、ラガーツは、「新しい道」“Neue Wege”という雑誌を舞台に、この宗教社会主義を一つの神の国に向かう社会運動として、そのために精力的に活動した。それに対して、クッターはこの宗教社会主義的信仰理解、聖書理解を、直接に社会運動として展開するのではなく、教会における牧師の務めの問題、説教の問題として受けとめ、説教が世界を変革し労働者の解放をつげる生ける神の言葉を伝えるものとなるために、発言し続けた。

バルトは、ラガーツとクッターという二人の先輩の間でラガーツの実践性に共感しつつも、神学の方向性と問題意識のうえでは、ラガーツからは距離を置き、クッターからの深く影響されつつ牧師としての働きにはげんだ<sup>(4)</sup>。また、聖書から「生ける」神の言葉を聴き取り、かつそれを伝えるために苦闘した。そこからして、私的所有＝むさぼりを原理とする資本主義の悪と害毒のただ中に、世を裁き、人を救う大いなる生ける神の働きが及んでいることと富める人々のおごりのむなしさを説き、貧しい人々をその陥っている宿命論の絶望から神の国への希望に向かって立ち上がらせるその恵みをつげた。またザーフェンヴィルの「労働者協会」の仕事として、労働問題の資料集を作成し、「福音と社会主義」、「新しい工場法」について講演をした<sup>(5)</sup>。しかし、そのように活発に社会主義者として活動したバルトも、あくまでもクッターと同じ線で、この宗教的社会主義的な問題意識を、神のリアリティ、生ける神との出会いの問題、何よりもその神と向き合って働くべき牧師の務めの問題、神の生ける言葉を語り伝える説教者と説教の問題として、受け止め考えたのであって、宗教的社会主義の神学そのものを、運動プログラムにするラガーツの道を取ることは考えられなかった。

そして、そのようなとき、バルカン半島にすでにくすぶっていた紛争が火を噴き、1914年6月28日、サラエボで起ったセルビア人テロリストによるフランツ・フェルディナントオーストリア＝ハンガリー皇太子夫妻の暗殺に対

## 第一次世界大戦の時代状況に向けたカール・バルトの説教（牧村）

して、7月23日オーストリア＝ハンガリーはセルビアに対して最後通牒をつきつけ、セルビアの回答を不満として開戦、ドイツはオーストリア＝ハンガリーを支持し、オーストリア＝ハンガリーに対して総動員令を發布したロシアに対して、さらにはフランスに対して宣戦布告、さらに中立国ベルギーに侵攻し、ドイツに対するフランス、イギリス、ロシアの宣戦布告となり、大戦勃発となった。理性的で文明開化されているはずのヨーロッパ中の国々が正気を失って互いに憎しみと攻撃に全力をそそぎあい、大砲が火を吹きあい、やがては都市に対する航空機による爆撃、破壊、非戦闘員にたいする無差別殺戮がなされたのである。

バルトはすでに、大戦前夜、そのようなヨーロッパの状況に向けて、ザーフェンヴィルの会衆に向けて、神の言葉を語ったが、それはどのようなものであったかを考察したい。

## 第2章 第1次世界大戦の状況にむけてのカール・バルトの説教から

### ① 大戦前夜1914年7月26日の説教<sup>(6)</sup>—そこ現れているバルトの説教の基本線

そのころのカール・バルトの説教原稿は、毎回A4用紙より少し大きい用紙3枚を重ねて中心線を二つ折りにして、12ページの小冊子をつくって、それに大きな字でいっぱい書いたものであり、その第1ページ目を表紙として、日付、特別の記念日や祝日の場合は、その祝日の名前、聖書箇所、説教した教会名が書いてあった<sup>(7)</sup>。そして、この日の説教原稿のこの表紙には、

「セルビアに対するオーストリアの最後通告」

とあった。セルビアのサラエボにおけるオーストリアのフェルディナンド皇太子夫妻暗殺事件に対してオーストリアがセルビアに対して出した最後通牒のことである。そして、この説教が行われた日曜日の6日後8月1日、スイスの隣国ドイツは、オーストリアを支持してロシアに対して宣戦布告ついでに戦争が、勃発した。ついでドイツは、フランスに宣戦布告中立国ベルギーを

侵攻して、ベルギーを通り道にしてフランスに軍隊を進めた。

このヨーロッパ中が緊迫した雰囲気のある時期に、バルトは、エフェソ2：4-6をテキストとして説教した。テキストは、こうある。

「憐れみ豊かな神は、私達をこの上なく愛してくださり、その愛によって、罪のために死んでいたわたしたちをキリスト共に生かし、キリスト・イエスによって共に復活させ、共に天の王座につかせてくださいました。こうして神は、キリスト・イエスのいて、私達にお示しになった慈しみにより、その限りなく豊かな恵みを、来るべき世に現そうとしたのです。」

バルトは、このヨーロッパの状況下にある人々への神の言葉として、説教の冒頭からいきなり切り出す、「愛する友人の皆さん。神は我々を『天の王座』につかせてくださった。これは全く驚くべき信じがたい使信ではないだろうか」と。「天の王座！」とは、すなわち、「平和」、「浄福」であり、そこで「人は、たがいにだまし合ったり傷つけ合ったりする理由をもっていない。人はたがいに見つめ合い、握手を交わすことが許されている。人間はもはや自分の事柄を見ないで、神の事柄を見る。」

これは現実から遊離して夢を語っているのではないだろうか。当然にも人々の間に起こってくるこのような疑問に言及して言う。

「『しかし、このような驚くべき状態のようなものはどこに存在するのか』と我々は問う。我々はある美しい遠い国のことをいっているのか。」そして答える。否、「天の王座は、至る所に存在しており、遠い国ではない。願望や夢ではない。…自明のこととしてそれは存在し、現在しており、太陽や空気や水のように現在しているのである。パウロはわれわれの浅薄な低い思想や習慣や仕事や組織よりも何かより大きな者が存在するということが、何か永遠な者が存在することを一瞬たりとも疑っていない。」そうだ、それは、あたかも私達をとりまく空気や水のように、私達の目には見えないが、気がつきさえすればよいように、私達がいるその場に厳然と存在し、それがなければ、私達は一瞬も生きていることはできないのである。パウロはそのようなこととして、「『神は憐れみ豊かであり給い、我々を愛し給うその愛によって

（われわれをその）天の王座につかせてくださった』という。それはあまりにも確実に喜ばしくそして完全に響く…。「ところが、われわれは、実際はそれを疑わずにはおれない。」いったいどういうことなのであろうか。

つまり、それは、私たちがまったく背を向けてしまっていて自ら見えなくなってしまう（自らを見えなくしてしまっている）、神の現実にはほかならない、ということなのだ。バルトは、私達の側からではない、むしろ私達の側を覆う黒雲（私たちが自ら引き入れている暗黒）にもかかわらず、この神の大いなる Ja! が存在するということを、聖書から聞き取り、それを会衆の間に響かせる。どんなときにも、その神を自明のこととして語る言葉の率直さ、透明さ、迫力は、後の彼のあらゆる説教の共通の特色をなすものであるが、宗教的社会主義者バルトにすでに現れているのは、注目に値する。ラガーツなどで宗教的社会主義は、社会主義思想ないし運動のコンテクストの中で、聖書の福音を再発見するというものであった。しかし、バルトにとって神の言葉、聖書の福音は、それ自体で力をもつものであり、それはこの世界に生きる人間一人一人に、彼が知ろうと知るまいと、信じようと思じまいと、彼に見えようと思えまいと、直接かかわっている。だから、バルトにとって、人間的な技巧によることなしに、それを直接語ることが問題であった（ここに実は、彼がこの世的なことを語る導入をいっさいすることなく、はじめから自明のように神を語ったことの原因があった）。その意味では、彼はもはやラガーツの言う意味での宗教的社会主義とはまったく立場を異にしていたといえるであろう。その立っている足場は、キリスト教でも社会主義でもなく、まったく自由な恵みとしての神の言葉、福音そのものであって、もはや彼はもしラガーツの立場が宗教的社会主義というのなら、宗教的でも社会主義者でもなかったといえるであろう。彼は何かの宗教とか主義に生きたのではなく、言葉の正確な意味で直接的に単純に神に生き、キリストに生きようとする信仰者であり、キリスト者であった。しかし、彼にとって、宗教的社会主義とは、聖書の福音そのもののことであり、人間の側のあらゆることのもにかかわらず、神の Ja が存在するというメッセージから、現代の資

本主義（むさぼりの体系）の時代に対して沸きあがり要請される社会主義であった。そして、まさにこの神の Ja においてこそ、この神の Ja を否定している私達の現実が、ここで鋭く明るみに出され、問題になるのである。

「しかし、われわれは神のこの大いなる Ja を疑っているのである。」そう指摘しつつ、バルトは問う。「これはわれわれ人間について、あなたについて、またわたしについて言っているのだろうか」と問い、神の Ja! に照らされていながら、それを疑わざるをえなくされている私達の現実、神の Ja を知らずまたそれに背を向けて、日々流れていく人々のよどんだ惨めな状況を明るみに出す。「われわれは、こんなに惨めで心配しなければならない。たくさんの臆病がある。人は権力と富を持つ者たちに用心しなければならない。われわれのうちだれが正直であり、真実であろうか。われわれのうちだれが、今親しく語りあいながら教会の道を歩いてきた人たちについて、まだ一度も悪口をいわなかつただろうか。人生は競争であり、闘争である。」

さらに彼は、広く「世界とその諸事情に」見いだされる根絶しがたい害悪を指摘する。「結核の犠牲者のこと」「アルコール依存症とそれによる家庭崩壊」「人々が養われはしても、」「疲れて病気になるまでこき使われ搾取される、どん欲な営利方法である資本主義」「そして、おそらくはわれわれは今日、全ヨーロッパを炎に包むかもしれない戦争の前夜を迎えている。何千もの寡婦や孤児たちの涙はまだ流れており、そして、新たに、何十万の人間が野獣のように解き放たれ、互いに知らずに何の害も与えたことのない何十万の人々が、再び撃ち合い、互いに殺し合うであろう」と。また、「このようなことを前にして、「あわれみ豊かな神がわれわれ人間を彼の愛によって天の王座につかせてくださったというパウロの見解は、ほとんど冷笑のように響かないだろうか？」という。

しかし、バルトは、今一度パウロに目を注いで言う。「パウロが天の王座と言うとき、彼は」単に「それを持っていればなあと言っているのではなく、それはここにある。いまここにある。あらゆる悲しみや不満足を伴う我々の人生のただ中に、あらゆる宿命や罪を伴う厳しい荒々しい世界のただ中にあ

## 第一次世界大戦の時代状況に向けたカール・バルトの説教（牧村）

る。そのようにパウロは本当に考えているのである。私達は彼を理解しようと努めなければならない。パウロにとっては、この世界に一つの事実が存在したのであり、それが他の全ての者よりも重要だった。この一つの事実のほかには、かれはこの世界において本来もはや何ものも重要だとは思われなかった。罪も困窮も死もそうではなかった。イエスという人間が一度この地上でわれわれ人間たちの間で、生き給うたという一つのものを思うときすべてのものが彼の周りから沈んでいった。たしかに彼は、世界の災いと悪質さ、人間の愚かさと肉体の苦悩、不正と暴力を見た。しかし、それはもはや重要ではあり得なかったのである。しかり、『確かにその通り。私は神を知っており、彼の愛を知っている。その愛は、介入しようとする一切より強く大きい。それは最終的には全てに打ち克つ。他の全ての者は一時的でしかありえない。』と」

そして、最後にバルトは、言う。しかし、結局「われわれがまだ、罪の中に死んでいる限り、神がわれわれにとって遠く無関係で、単なる言葉にすぎないかぎり、この天の王座についてどれだけ考えても、多くの説教を聞こうとも、善のためにどれだけ努力しようと、何の役にも立たない。われわれは、まず始めに、我々の中で、『私は存在する』と我々の魂の中で語る生ける真の神が必要なのだ。この神を見いだしたなら、我々は天の王座の中に直接に存在している。世界は沈み、それは我々に対して何の力ももっていない。大切なことは悲しむべきことに霧は深くたれ込めていても、それは霧にすぎず、山ではない、ということを知っていることである。主要なことは、自由と愛と平和の世界がそこにあり、それが本当の世界だ、ということを知っているということである。霧のただ中であっても、太陽を信じる、ということである。」

このようにバルトは会衆に、戦争にいたった世の暗黒のただ中であっても、決して消されることがなく、私達を天の王座につかせてくださる生ける神に目を向けるように促し、その前には、世の悲惨な状況も戦争も病も死も、世のすべてのものもその前には退かせられる神の愛、神の国、神の平和を高ら

かに語るのである。しかし、それを信じることは、現実離れして生きることではない。そうではなく、世の暗黒のただなかで、この世の暗黒を信じるのではなく、暗黒を過ぎ去らせる神を信じ、神からくる愛と平和を本当の世界だと信じて、それを生きるのである。

バルトの説教のこの積極的で喜ばしい福音のトーンは、次第に明確にバルトの説教に響くトーンになっていく。そこで説教者と会衆が共に直面している時代の暗さによらない、いや暗ければ暗いだけ、その光の明るさは、私達の世と心の闇の深さを明るみに出していく一方、その夜闇が深ければ深いだけ、ひととき明るく光る星のように静に強く、心の励ましになって輝く。このように語るバルトは、もはや社会主義運動の中に生ける神の働きを見るという宗教的社会主義者のバルト自身をこえている。確かに彼は生涯社会主義者であった。しかし、神の国は、どこまでも神の国であり、神がイエス・キリストを通してもたらされる支配であり、人間の一つの運動である社会主義とは次元の違う事柄である。神は神であり、人は人である。神から出るものと人から出るものを混同してはならない<sup>(8)</sup>。そのことは、バルトがどんなに宗教的社会主義であっても、バルトにあまりにも明瞭である。このような神に対するセンスをもったバルトは、生ける神への問いという意味では、クッターと一緒に動いているようであるが、彼はすでに次第に、事実上、クッターの影響から離れるようになっていく。そして、それが決定的になるのは、クッターがドイツ神学界の多くの人々とおなじように、戦争を支持をしてからである。そして、それはバルトに、次の節で言及するように、このような純粋な神への信仰の大切さを衝撃的に彼に証拠づけることになった。

## ② 大戦がバルトに与えた衝撃

さて、上の説教をして6日目の1914年8月1日ドイツのロシアへの宣戦布告をもって大戦が勃発したが、これはバルトにとってどういうことであったであろうか。戦争は、ザーフェンヴィル村の人々にも、強い影をおとした。多くの男たちが、国境警備隊に入隊させられ遠くへ旅立った。牧師は入隊免

除になったので、バルト牧師は、男手をとられた農家の干し草作りの手伝いをし、教会の一部を、ザーフェンヴィルに駐留する兵隊の読書室として提供するなどした。こういうことは、彼にとって「この戦争が彼に及ぼしたのもっとも小さなことであった。」しかし、この戦争は、バルトの心を震撼させ、かき乱した。「1914年世界中が戦争勃発によって息をのんでいたとき、私は、この戦争を私のすべての説教で、暴れまわらせる義務があると感じた。結局ついには一人の教会員の女性が私のところに来て、少しは別のことも語ってくださいよ、と頼んでくる始末だった」(Homiletik 1966)<sup>(9)</sup>と後のバルトは、自らへの可笑しみ・ユーモアをにじませつつ述懐している。しかし、その時には夢中だった。この説教で「戦争を暴れ回らせる」とはどういうことであったであろうか。それを解く鍵は彼の説教自体にある。

彼の説教に見ることができるが、バルトにとってこの戦争がそれほど衝撃的な意味をもった出来事であったのは、この戦争そのものの悲惨さというより、これがヨーロッパ世界とりわけキリスト教とその教会と神学、その道德、文化の破局を意味するものであったからである。なぜなら、ヨーロッパ文明の生み出したあらゆるよきもの、価値あるものが、戦争の人殺しのために総動員されたからである。後で詳細に検討するように、その中に彼は、ヨーロッパとその文明・文化に対する、また、その中に浸かって神学を学び、その神学をもって牧師として働いている自分に対する神の怒りの裁きを見た。また同時に、その神の怒りの裁きの中に世界を新しして、人を罪から解放し救いに至らせる神の大いなる働きをみたのである。だから、彼にとって、あたかも、預言者イザヤがそうであったように<sup>(9)</sup>、戦争を語ることは、神を語ることであったのである。彼個人として、また牧師＝神学者として二重に衝撃的だったことについては、「93人のドイツの知識人たちが、ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世と宰相ベットマン＝ホルベークの戦争政策に、全面的に同意を与える恐るべき声明をだした。そこに署名された名前のなかに、私がドイツで習ったほとんどすべての先生の名前をも発見しなければならなかった（さすがラーデ先生だけは例外！）のには、啞然とするばかりであった。」「ハル

ナック、ヘルマン、ラーデ、オイッケンなどが、新しい状況に自分をあわせ、宗教も学問も完膚なきまで精神的420ミリ砲に変わってしまったのを知ったとき、私は神々のたそがれを体験した」といった自己証言に明らかである。こうしてバルトが、「今まで、原則的に信じるにたると思っていた釈義や倫理学や教義学や説教の世界が、根本的に動揺しはじめた。」<sup>(10)</sup>

さらにバルトにとって、衝撃が加わったのは、「一種の神のハンマーとしての役割を」期待されていた、ヨーロッパの社会主義までもが、戦争イデオロギーに屈服して、戦争支持にまわった<sup>(11)</sup>ことであった。そして、彼の尊敬するクッターも同じであった。

しかし、これはバルトを社会主義から離れさせることにはならなかった。むしろ反対である。一見不思議なことに、戦争前スイス社会民主党に入るように強く勧められても、かたくなに見えるほど慎重だったバルトは、戦争イデオロギーへの屈服の故に社会主義を批判しはじめたそのとき、同時に彼は社会民主党と連帯を表明し、スイス社会民主党に入党したのである。これについてバルトはこうしている。「日曜日ごとにわたしは究極のことについて努力するからこそ、このことは私を現在の悪しき世界の上にかんでいよう雲の中で漂うことを救いはしなかった。むしろ今こそ、大いなるものへの信仰は、不完全なものの中での労働や苦しみを排除するものではなくて、含み込むものであることが示されねばなかった。」<sup>(12)</sup>

バルトはいう。「おそらく2年前なら私が社会民主党入党によって本質的な方向性に忠実でなくなるということがひょっとして起こりえたかもしれないが、もうそういうことはありえないだろう」ということだ、と。また、わたしが彼らと一致していたときより今の方が、彼らによりよいものを提供できるだろうと思ったので、入党したのだ<sup>(13)</sup>とも言っている。

バルトの説教は、どこまでも純粹に神を語る。神にあるおおいなる無条件な肯定を語る。しかし、それは、人を世の現実（不完全なるもの）との関わりから離れるということではなくて、ますますダイナミックに不完全な人の世を救い受け入れ、その現実に関わることへと根底から力を与えられることに

なるのである。

バルト自身そのように生きた。後にたとえば、彼の教義学Ⅱ/2 神の選びの論についてまさにキリスト教2000年来の、とりわけカルバンの神学の根本問題と批判的に取り組むキリスト教教義史を新しくするようなことを大学の講義室で展開していたが、その神学は、書斎だけで形成されたのではなく、ナチスの反ユダヤ政策に抵抗して迫害されるユダヤ人を支え、匿い、守る運動への彼の参加、協力と同時になされ、この運動の神学的背景をなし、かつこの運動を促し励まし導くものであった、ということが、最近のエバーハルト・ブッシュの本『カール・バルトと反ナチ闘争』<sup>(14)</sup>で明らかにされた。

さて、第1次世界大戦中のバルトの説教は、戦争を神の審きとして語りつつ、時期が進むにつれ、ますます生き生きとその審きの背後に貫く、神の福音における喜びと自由を語る。神の大いなる肯定を語る。今それを三つの説教によって確かめることにしたい。

### ③ 第1次世界大戦中の説教から一その1，1914年8月23日の説教<sup>(15)</sup>

バルトは、大戦が勃発して間もなく、黙示録6：4 およびマタイ10：18をテキストにして説教した。テキストの本文はこうある。

黙示録6：4 「すると、火のように赤い別の馬が現れた。その馬に乗っている者には、地上から平和を奪って、殺しあいをさせる力が与えられた。」

マタイ10：28 「体は殺しても、魂を殺すことの出来ない者どもを恐れるな。むしろ魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れよ。」

スイスは中立国で、一応は戦争の渦中からは免れていた。それでも戦争の勃発の当初は、スイスの人々の衝撃は大きかったのである。とりわけ、同じ中立国であってもドイツによって侵攻を受けたベルギーの例は、人々の間に危機感を大きくした。しかし、一月ほど立ってみて、事態はそう悪くならな

かったので、スイスの人々は少し安心していた。バルトは、そのように立ち直って安心しかかっている会衆に、眠り込まないように警告を与え、この戦争が、実はもっと深刻な問題をスイス人にも投げかけている我々に対する神の裁きであることを強調する。

「わたしは、われわれすべてが、事柄を重視し、今の時のしるしを見抜いてほしいと思う。今の時は、以前と同じく神の時である。唯一無比の審判の時である。しかし、まさにそれゆえに、また恵みの時でもある。今聞く耳を持つ者にとってはまさにそれなのだ。」戦争は人がなしているものであるが、しかし、この戦争は、神が人に、裁きとして差し向けたメッセージに他ならない。だから「今の時は唯一無比の時、神の裁きの時なのだ、そして、だからこそ、恵みの時でもある」とバルトは言うのである。

ここでバルトは、ヨハネ黙示録の当該箇所のでてくる「赤い馬」とこの戦争とをむすびつけている。それは、黙示録において、玉座に座っておられる方（神）の右の手にある巻物の第2の封印を、その封印を唯一解くことの出来る屠られた子羊（イエス・キリスト）が解く時に現れる「赤い馬」のことである。この黙示録が象徴的に語るものを解明すれば次のような二つのことだと考えられる。第1に、戦争のあらゆる愚かさ、不条理、悲惨は、人間の罪に対する神の裁きであり、またそれは、神が人間から罪を取り除かんとする救いの恵の一部であるということであり、第2にこのことは屠られた子羊、つまり十字架につけられて殺されたイエス・キリストにあって、まさにそれがそうであると封印が解かれている、つまり解明されているということである。つまり、戦争のあらゆる愚かさとは不条理と悲惨は、イエス・キリストの十字架の死によってすでに裁かれて終わらされている人間の罪の最後のあがきのようなものであり、その悲惨の神の手による暴露である。

バルトは言う。だから、この戦争は、世に神への背反、罪のあるかぎり、裁きとして起らなければならなかった。「戦争は、あの黙示録における一人の騎士のように、一つのきびしく不可避の必然として、我々に向かって引き出され、我々の身の上のしにかかってくる。『地上から平和を奪って、殺し

あいをさせるために、赤い馬が現れた。』」ちょうどそのことを示すように「戦争は世界の様相を変えた。何千という福祉や富の源泉が切断され、民族と民族の人間的交流が終わりを告げ、冷たい沈黙か、告発と中傷が現れた。敵をうちまかし、勝利しなければならない、という要求以外のすべては忘れ去れる。そして、相互の破滅が始まろうとする。」「恐るべき精神的、道徳的退化。暴力が主権を占める。憎み、殺し、滅ぼすための解き放たれた本能的衝動。」「平和の維持を期待された諸努力は全て無力であった。マモン、国際的資本はそれを出来なかった。むしろ、あの過熱した商売や金銭の利害こそ国々を闘争へと駆り立てたのだ。社会民主主義者もこの戦争を止めることは出来なかった。キリスト教も、少なくともキリスト教会は到来する戦争に直面して何も出来なかった。キリスト教の国々が、世の光であるべきなのに、にらみ合って、全力で滅ぼし合うことだけを考えている。」

この言葉には、先ほど②にバルトが大戦勃発と同時に衝撃を受けたこととして言及したが反映している。バルトは、このように語った後、あの主要メッセージを展開する。「戦争は我々の上を下る神の審きである。すべての不幸は審きそのものである。審き！それは、神は我々の間違いとそれに対する神の不満とを今や再び語ろうとする、ということの意味する。神はわれわれの生活のまっただ中に一つの事実を仮借なく提示しながら、語られる」。つまり、私達ヨーロッパの誤りの事実を。

「われわれヨーロッパ人は正しい歩みをしていると考えていた。豊かな暮らしと幸福を増大させようと熱心に気を配ってきた。身につけた教養を非常に誇りとした。非文明的な地球の他の部分の住民を、また自分たち自身の祖先を見下していた。」

「今神がこられ、我々に向かって素っ気なく、厳しく言われる。否、おまえたちは正しい歩みをしていない、と。我々に戦争をさしむけながら。」

「神の裁きはいつもこの通りである。それは自然的な奇跡としてくるのではない。我々自身のなしたことの当然の結果として来るのである。災いはわれわれが賞賛していた文化の中に隠されていた。」

「我々はお互い利己的でねたみ合って対峙していたし、各人は強欲にも一生懸命やって出世することを求めていた。各人はますます強大になろうと欲した。」「我々の文化の中にある傲慢と利己心、権力や力への固執これらが実を結んだのだ」「我々が持っていた平和というものは、…密かな覆われた戦争というものであった。隠れていた戦争がいまや一気に白日のもとにさらされたのだ。」と。今この神の裁きの時に何をなすべきか。「主よ、われらを憐れみ給え」と祈るほかはない、と。

そして、二番目のテキストは、「体を殺しても魂を殺すことの出来ない者を恐れなくてもよい」というイエスの教えを示しているものであるが、このテキストによって、バルトは、ここに、神の裁きの前に、主よ、憐れみ給えという祈るほかない私達に、私達がどのような仕方で神に向かって叫ぶのか、どのような仕方で神の裁きを恐れおののくのか、をイエスが教えてくれているのだ、と語る。「人々が殺されていること、町々村々が破壊されていること、金銭の損失、飢餓その他、戦争による様々なものの喪失は、体を殺すことは出来るけれど、決して魂を殺すものではない、だから、それを恐れる必要はない、と。むしろ、体も魂も地獄の火に投げ入れる力ある方を恐れよ、と。実際、神がこれらすべてをもって、「わたしはあなたと別れる。…わたしはあなたを必要としない」ということを聴くとしたら、神の否を聴くとしたら、どんなに恐ろしいことであろうか。

それ故にバルトは言う、「このままでは我々は平和になることは出来ないし、この時代を乗り越えることは出来ない。われわれは彼の招きを聞き、それに答えよう。『主よ、私は罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません』と」。

だからバルトは言う、「神がなされる恐るべき裁きもまた神の恵みの一つであることを知るように」と。

このように、戦争は、われわれのキリスト教と呼ばれるものも社会主義をも含めて陥っていた罪と傲慢と利己心にたいして神が差し向けられた裁きである。しかし、それは、わたしたちに、神を畏れることを教え、悔い改めに

導く恵みである，とバルトは語るのである。

④ 1914年10月11日マルコによる福音書10：17-23による説教<sup>(16)</sup>

テキストの内容は次の通りである。

ある人が走り寄ってきてイエスにたずねた

「よい先生，永遠の命を受け継ぐには，何をすればよいのでしょうか」と。イエスは言われた。「なぜわたしを『善い』というのか。神お一人の他に善い者はだれもいない。『殺すな，姦淫するな，盗むな，偽証するな，奪い取るな，父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ。」すると彼は，『先生，そういうことはみな子どもの時から守ってきました』といった。イエスは彼をみつめ慈しんで言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っているものを売り払い，貧しい人々にほどこしなさい。そうすれば，天に富をもつことになる。それからわたしに従ってきなさい。

この人は，この言葉に気を落とし，悲しみながら去っていった。

このテキストからバルトは「富める青年，自信家が問いを持つ人間に変わった。私が思うに，今の時代も，同じようなことが大勢の人たちに生じているのではないか。彼らは，かれらのキリスト教を信じていた。人類が達成した教養と文化を信用していた。ところが今や世界大戦がやってきたのだ。…」と語り，この青年と今の大戦の悲惨さに直面したヨーロッパの人々の精神的動揺を重ね合わせている。

「大戦は何をうみだしたか，戦争は，実にわれわれが何者であるかということ暴露した。それはわれわれにいかなる説教よりも明らかに告げている。君たちの生き様は違っていると。」

「今や多くの人たちに，全ての別の者が不確かになる中で，確かな土台を手に入れるにはどうしたらいいか，という問いが起こっている。」特別に敬

虔になること、様々な賞賛される善行。それに対してバルトは聖書テキストから語る。

「しかし、イエスは、〈すること〉を指し示さない」と。というのも実際、何かをすることをどんなにしても、われわれは同じ者であり続け、私の人間存在は変わらないからである。「イエスはただ、殺すな、姦淫するな、盗むな、奪い取るな、父母を敬えという、彼も知っているような、「日常生活の中に日々与えられている唯一善き方である神ご自身の言葉としての」十戒を示すだけだ、と。

それは、「真理、純粹、愛、隣人の財産、生命、名誉」といった端的な言葉でしめされる事柄であり、「それが響いてくるときわれわれを捉える不安があるのではないか。我々がそれをまだ完成しておらず、これから長くかけても完成しないという不安」とバルトは指摘するのである。そしていう。

「この状態が変えられることはとてつもなく困難なことである。なにかあることを〈すること〉はどんなに容易なことであろう。お金を赤十字に寄付することは、家庭に平安があるように心を配ることに比べたら、どんなに容易なことであろう。兵士たちに靴下を編むことは、もはやそんなに欲張らないことにくらべたら、どんなに容易なことであろう」と。

しかし、この地味な事柄、すなわち「十戒に聞き従ったなら われわれは今 戦争などしてはいなかったであろう」と。

しかし、この男はイエスを理解しなかった。彼は答えた。「そういうことはみなしてきました。」イエスは言った。「あなたに欠けているものがある。行って持っているものを売り払い、貧しい人に施しなさい。そうすれば天に富を積むことになる。」そうすると、彼は気を落とし立ち去った。

このことから、バルトは言う。

「ところで皆さん、この男が満たすことができなかった十戒、それは一体何なのか。

これはまさしく、神と隣人の僕であるという律法、戒めに他ならない。」「律法に聞き従う者は、もはや『それは私である。私の権利である。私の名誉で

ある。私の所有である』と言うことはできない。」富んでいようと貧しかろうと。ところが、〈私〉と〈私のもの〉のために人間は相互に苦しめあい、戦争を引き起こしているのだ。

「十戒の殺してはならないとは、私の命を兄弟のために捧げなければならない、ということだ。盗んではならないとは、わたしの持っているものは彼のものでなければならない、ということだ。この法則が支配するところ、そこが神の国である。神の国は貧しさも豊かさもない。ここに永遠の命があるのだ」と。

ここでバルトは、戦争を生み出したものを非常に明瞭で身近で単純なものに帰せしめる。戦争は、神と隣人の僕であるようにという神の戒めからの離反、〈わたし〉と〈わたしのもの〉がひきおこしたものだ。「その人は気を落とし、悲しみながら去っていった。たくさんの財産をもっていたからである」という福音書の言葉を引用しつつ、バルトは言う。「まだ私と私のものがあまりにも強すぎる。まだ不安があまりにも多すぎる」と。会衆は、自分の心の暗い奥底をえぐり取られ、ほかならぬ自分が不安の中でこの世に安住しようとするその富める青年であることを自覚させられざるをえないであろう。その会衆に対して、究極の言葉が語られる。「しかし、今やわれわれは永遠の命に通じる道を知っている。それは、金であれ、名誉心であれ、…、要するに私と私のものに関連するすべてのことからより自由になることを意味している。それにまだこだわっている限り、解放されえない。自分が欲することを、〈している〉にすぎないのだ。」このようにして、バルトは、戦争の底流に〈わたし〉〈わたしのもの〉へのこだわりがあり、戦争をとおして神はこの問題と私達を向き合わせたのであり、戦争から解放される道は、この〈わたし〉と〈私のもの〉から解放されるほかはないことを明らかにする。

そしてこのことは、足下にすでに差し出されている神の真理を受け入れるということによってなされるほかはないのだ。このことは次の説教でさらに明らかに語られる。

⑤ マタイ 7 : 24-27による説教 1915年 8 月 1 日<sup>(17)</sup>

大戦勃発から 1 年目。

バルトは上記のテキストに従って、力と価値とかわらずたち続ける行いや存在、真理が、不安や弱さや罪深さを跡形もなく消してしまい人間に勝利に満ちた力を下さるようなありかた、をあげ、これを「わたしのことばを聞き、かつそれを行う者を、自分の家を岩の上に立てた賢い人に等しいという」とする。

他方、「砂の上に家を建てた人」、即ち、はじめから弱さであり、虚無であり、過ぎゆく者に属する行為や存在をあげる。それは、人間が神の真理をきくには聴くが、真剣にうけとらず、従順ではない場合である。どんなに人間もその神の真理から、それを聞くことが出来ないほど、離れていることはあり得ないのに。

そして戦争に言及する。ここでも言う。「戦争は人間が本来何者であるかを恐るべき正直さで明るみに出してしまった。この戦争は、ヨーロッパの人間が今まで生きてきた精神の生み出した必然的な結果なのだ。」そして、この何も問題のないはずのヨーロッパのキリスト教精神のどこが問題だったのかを指摘する。「たしかにわれわれは内なる魂にある我々の小さなきらめきを抱えて生きてきた。われわれは神なきものではなかったし、悪徳に身を売ったものでもなかった。しかし、それが間に合っただけではなかったことに気がつかなかったのだ。たしかに心の揺らぎが、われわれに多分こう告げた。本当の命が始まるには、まだ何かちがったものが来なければならないのだと。しかし、われわれは、もとのままでいこうと大急ぎで身構えた。」そして言う「我々は気がつかなかった。神が、魂の内面の輝きよりも、教会での慰めよりも、キリスト教的な家庭においてや、共同で何か努力している際に、あるいはよき理念において、あちこち燃える小さな火なんかよりも、もっともっと大きな方であろうとされるということに気がつかなかったのだ。神は新しい方であるのに、新しい世界全体の光であるのに！この生ける神をわれわれは信じず、この神をわれわれは真剣に受け取らなかった。」そして、なぜ悪

魔が勝利してしまったか、をここから結論する。「人がありとあらゆる仕方  
で信じ、よい行いをし、よい行いをなさんと努力する、しかし、生ける神の  
ためには何も決断しようとしな。そのところには悪魔のために働きがなさ  
れているのだ。そこで悪魔はその数々の偶像を建てる。情熱や欲望をかき立  
てた。そしてついに、あつという間に自分でももう先に行きたくないところ  
にまで来てしまった。あつという間に、戦争があったのだ。『大雨が降り、  
洪水が押し寄せてきて、暴風が吹いてきて、家におち当たってくる。そうす  
るとそれは倒れる。そして、その倒れ方はひどいのである。』というわけだ」  
と。バルトは、このように、ヨーロッパ世界の危機と動揺と自己崩壊を、こ  
こでイエスが語る洪水に重ね合わせ、それはまさに父の御心に生きるという  
確かさに生きなかつたヨーロッパの姿をえがくのである。そして、バルトは、  
一応戦争の圏外たっていると思っているかもしれないスイス人に向かって言  
う。

「まさにこの自己崩壊にわれわれスイスも巻き込まれていくことになるで  
あろう。もっとも深い根源において生ける神から切れてしまった人間とその  
存在が、今やその仕上げとして突っ走ってしまうところ、それが自己崩壊と  
いうものなのだ」と。

そして最後に、バルトは次のように救いの福音を告げて結ぶのである。

「では、岩の上に立てられたもう一つ別の家は、どこにまだ残されている  
だろうか。おお、驚くべきことに、その家はたっている。すべてのものが揺  
れ動いてもそこに立っている。そして、我々はその家をさらに建てあげる手  
伝いをしてもいいのだ。それは、暗い夜に続く新しい日のようにイエスにお  
いて始まった人間性そのもののことである。神の力を源として神の光の中を  
生きる新しい人間性である。」

これは、戦争が、生ける神から心を閉ざして、キリスト教的宗教的自分の  
義を追い求めたことの結果であることを論ずることは、一貫しながら、生け  
る神の肯定の力を力強く伝える説教である。神の肯定が生き生きと語られれ  
ば語られるほど、その裁きもリアルに生き生きと語り伝えられる。それは、

説教の全体に喜びの調子が充ち満ち、根源的な悔い改め、神への方向転換を促す。

わたしたちがこの1915年8月の説教を1914年中の説教と比べるとき、神の大いなる肯定は、ますます生き生きと語られ、それはまたわたしたちを、神の証人として、福音の証しへと、そしてこの不完全な世のただ中で、世の流れに流されないあり方へと、いつも新しく神の言葉出合いそれに従う新しい行いへと促すのである。

1914年の説教と1915年の説教の間にこのような変化があるとすれば、1914年から、1915年の間、4月に、バルトはクリストフ・ブルームハルトを訪ねて、大きな刺激を受けたと言うことがあった。それが転機になった可能性がある。しかし、またそれに先立つ、レントと受難週、復活祭のイザヤ書の苦難の僕の歌の連続説教を読むとき、ここにすでに、バルトの説教の飛躍的な発展が見られる。バルトの説教のこのような内的な変化と発展については、稿を改めて別の機会に論じたいと思う。

## 結びのことば

第一次世界大戦のヨーロッパの危機的状況に向けて、バルトは、聖書が示すところから、ヨーロッパの文化とキリスト教に対する神の裁きを語った。それは、ヨーロッパ文化もキリスト教も、その中心においては、神への信仰ではなく、神からの離反ととしての〈私〉というものを根本原理としているからである。自らの一番中心のところにおいて、〈私〉ではなく、神が来なければならない。そして、わたしははじめから神とのかかわり、他の人々とのかかわりにあることが、認識されなければならない。そして戦争の衝撃的なすさまじさは、まさに神が人間に人間の自己中心としての罪を知らせ、神の国の民としての新しいあり方へと人を招いておられることの一部であることがバルトの説教から明確に語られた。

今日、戦争や破局が問題にならないときはないが、バルトのこれらの説教

## 第一次世界大戦の時代状況に向けたカール・バルトの説教（牧村）

は、これらの状況に向かって、私たちは神の言葉をどのように聞き、何を語るべきか、のヒントがここにあるともいえるであろう。

### 注

#### はじめに

- (1) Eberhard Busch : *Karl Barths Lebenslauf* (Kaiser Verlag) (以下 *Lebenslauf* と略す) p.73
- (2) K.Barth : *Predegten 1915 (TvZ)* (以下と略) p.314  
(訳『カール・バルト説教集』(以下と略す) 14 巻 (日本基督教団出版局) 63 ページ)

#### 第 1 章

- (3) *Lebenslauf* p.85
- (4) *Lebenslauf* p.90
- (5) *Lebenslauf* p.92

#### 第 2 章

- (6) *Predigten 1914*, p.384-395 (No.231) (『説教集』 13 82~96 ページ)
- (7) 『説教集』 あとがき
- (8) このことは、バルトの 1914 年になされた別の次のような説教のことばから、鮮やかに知られる。「私はどんな説教の際にも、『神』という言葉に及ぶと、だいたいいつも立ち止まって考えをめぐら (studieren) さずにはおれない。」「神はいます、というこの短いことばは、一つの革命を意味する。」「どんなことがあっても」神の事柄を、「教会制度の事柄とか、他の努力したらよい善き事柄とか必要な事柄とすり替え」てはならない。「まず神の事柄であり、次に我々の事柄なのだ。」もし神と全ての線において真剣にかかわる人がいたなら、社会的な困窮についても解決があるということになるであろう。「社会主義とは福音のきわめて重要なそして、必然的な応用なのだ。」(*Lebenslauf* p.92)
- (9) *Lebenslauf* p.93
- (10) ibd.
- (11) *Lebenslauf* p.94
- (12) *Lebenslauf* p.94~95
- (13) ibd.
- (14) 新教出版社, 2002 年, 原書は, Eberhard Busch : *Unter dem Bogen des einen Bundes*, Neukirchner Verlag
- (15) *Predigten 1914*, p.430-442 (235) (『説教集』 5. 17~96 ページ)
- (16) *Predigten 1914*, p.505-517 (241) (『説教集』 5. 103~120 ページ)
- (17) *Predigten 1915*, p.303-313 (283) (『説教集』 14. 61~76 ページ)